第３章　人吉市の特性

１　人吉市の強み

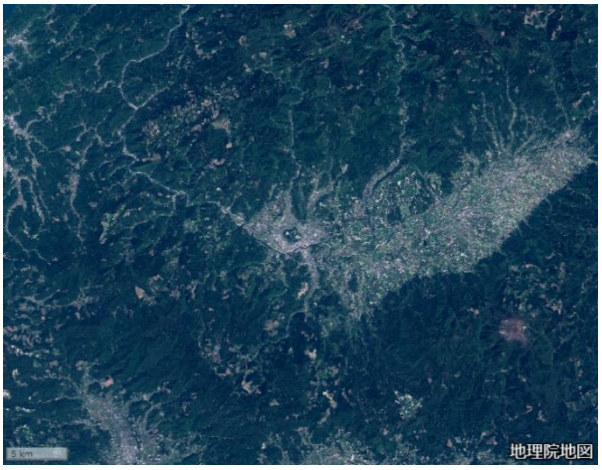
１）地勢、自然環境の恵み

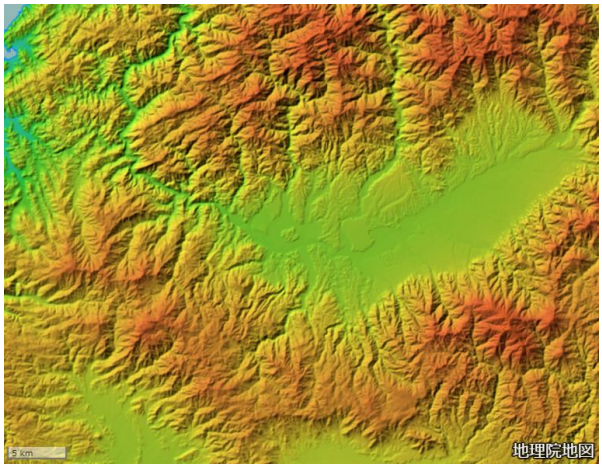
（１）地勢

本市は、熊本県の最南部、周囲を高い九州山地に囲まれた人吉盆地（東西約 30km、南北約 15km）の西南端に位置し、市境は、鹿児島、宮崎の両県に接しています。

人吉盆地のほぼ中央を日本三急流の一つである球磨川が東西に貫流しており、市内では万江川・山田川・鹿目川・胸川など多数の支流が球磨川へ流れ込んでいます。

■人吉盆地周辺の地形





図出典：国土地理院（左：空中写真、右：色別標高図）

（２）米

人吉・球磨地域は熊本県内でも有数の歴史ある稲作地帯で、江戸時代の中期には、2 万 2000 石の朱印高に対して、4 万石以上のお米の生産高があったと言われています。

球磨川から湧く豊富な水資源や盆地特有の寒暖差の大きさなど稲作に適した土地であるとともに、九州山地に囲まれているため、外部から米の搾取を受けなかったことも稲作文化の発展に影響したと言われています。

江戸時代中期には幸野溝と百太郎溝が完成し、人吉藩の農業生産が向上しました。この２つの灌漑用水は、世界かんがい施設遺産にも登録されています。

近年では、米の消費量低下に伴う生産調整廃止等の影響により、水田を使った加工用米（酒米含）、野菜を中心とした転作作物の栽培、水田収益力強化に向けた二毛作が進んでいます。

（３）茶

人吉・球磨地域は熊本県最大のお茶の産地です。

朝霧と寒暖差に恵まれ、相良村を中心に大規模な茶団地が形成されています。

相良藩では、米以外にも四木（椿、絹、漆、茶）が年貢として納められ、茶は約 1,000 年前に領主に献上された歴史もあります。

現在は、最良品種「さえみどり」を用いた玉緑茶（たまりょくちゃ）を生産しています。

２）歴史的な歩み

（１）相良 700 年の歴史

鎌倉時代初期に鎌倉幕府の地頭として、遠江国（現在の静岡県）から相良氏が入国しました。

以後、相良氏は、幾多の戦乱を経つつも、明治維新までの約 700 年間、この地方の大名として一貫してこの地を治めてきました。このように鎌倉時代以来、一つの武家が同じ地域を支配し続けた例は、全国でも薩摩の島津氏のほかわずかしかありません。

相良氏は、領地を広げる中で、旧来の豪族が治めていた土地に根付いていた文化、建造物、心のよりどころとなるものを認め、寛容に受け入れてきました。

そのため、本市には国宝・青井阿蘇神社や国指定史跡の人吉城跡をはじめ、相良氏統治以前の文化財も含め、数多くの重要文化財が存在しています。

神社・仏閣、古い町並みなどが点在しており、今もなお落ち着いた城下町のたたずまいを残しています。

また、人吉・球磨の人々の気質は「人吉・仲良し・こころ良し」と称されます。

これは、相良家による鎌倉仏教文化から生まれた「祈りの里」としてのおだやかで大らかであたたかな気性を表しています。

このように、領主と民衆が心をひとつにして、地域の文化を守り、新しいものを取り入れ、独自の文化として昇華してきた相良 700 年の歴史のストーリー性が評価され、2015(平成 27)年 4 月 24 日には近隣の球磨郡の各町村と並んで「相良 700 年が生んだ保守と進取の文化 ～日本でもっとも豊かな隠れ里―人吉球磨～」が日本遺産に認定されました。

作家・司馬遼太郎は、著書「街道をゆく」の中で、人吉・球磨地域のことを“日本でもっとも豊かな隠れ里”と記しており、日本遺産の登録の一助になっています。

また、人吉のまちは盆地の自然景観や、歴史的な町並みやたたずまいから「小京都」と称されました。

本市は、1985(昭和 60)年に京都とゆかりのまちが連携して、まちのイメージアップと観光客誘致を図ることを目的として結成された全国京都会議にも加盟しています。

（２）鉄道

本市では、1908(明治 41)年に肥薩線の八代－人吉間（川線)、1909(明治 42)年に人吉－吉松間（山線）が開通し、1924(大正 13)年には湯前線として人吉-湯前間が開通し、それまでの球磨川の舟運や人吉街道を利用した物流に大きな変革をもたらしました。(湯前線は、1989(平成元)年に後の第三セクターのくま川鉄道に転換されました。)

また、肥薩線の開通が産業近代化に大きく貢献したことから、市内の大畑駅や矢岳駅、人吉機関車庫など肥薩線に関係する施設が、2007(平成 19)年に経済産業省が取りまとめた「近代化産業遺産群 33」の「九州南部における産業創出とこれを支えた電源開発・物資輸送の歩みを物語る近代化産業遺産群」の物資輸送関連遺産となっています。

さらに、2017(平成 29)年には(一社)日本イコモス国内委員会の「日本の 20 世紀遺産 20 選」に、人吉機関車庫や矢岳第一トンネル等を構成資産とする肥薩線が選定されています。

水害以前は、ＳＬ人吉をはじめ、いさぶろう号・しんぺい号（人吉－吉松間)、特急かわせみやませみ（熊本－人吉間)、田園シンフォニー（人吉温泉－湯前間）などの観光列車が運行していました。

また、国内唯一の現役石造鉄道車庫である人吉機関車庫、ループ線とスイッチバックを併せ持つ大畑駅など見どころが多いことから、鉄道のまちとして広く知られています。

2015(平成 27)年には、これら日本の鉄道史に残る文化遺産の歴史や文化的価値を伝えるため、人吉駅の隣接地に「人吉鉄道ミュージアム MOZOCA ステーション 868」を開業し、肥薩線に関する写真や展示、映像を通じて、その魅力を伝えています。

令和２年７月豪雨ではＪＲ肥薩線、くま川鉄道ともに甚大な被害を受け、今もなおＪＲ肥薩線の八代～吉松間、くま川鉄道の人吉温泉－肥後西村間では運休が続いています。

くま川鉄道は 2026(令和８)年度上半期内に全線再開が見込まれており、ＪＲ肥薩線も、八代-人吉間については 2033(令和 15)年度の復旧に向けた熊本県とＪＲ九州の最終合意がなされました。(令和６年度末)

2024(令和６)年には、国内で現役最古の蒸気機関車として活躍し、2024(令和６)年３月に引退した SL 人吉（ハチロク）の譲渡を受け、同年 11 月より一般公開を行っています。

（３）水害との戦い

球磨川流域は、人吉・球磨盆地が急峻な山々に囲まれたすり鉢状の地形で、複数の急流支川が流れ込んでいます。

また、さらに盆地の下流側が山間狭窄部となり、豪雨時には水位が上昇しやすい地形となっており、度重なる洪水被害に見舞われてきました。

熊本測候所編の「肥後の風土誌」によれば、869(貞観 11)年にはすでに、球磨川で大洪水が発生したとの記録が残されており、記録に残っているだけでも過去 400 年余りの間に 100 回以上もの水害が記録されています。

戦後も、1965(昭和 40)年７月、1971(昭和 46)年８月、1972(昭和 47)年７月、1982(昭和 57)年７月などに洪水が発生しており、特に、1965(昭和 40)年７月洪水では甚大な被害が発生し、市内では市街地の３分の２が浸水するとともに、多くの家屋が流出しました。人吉水位観測所では計画高水位（5.12m）を大幅に上回る 6.70ｍの水位を記録し、青井阿蘇神社では楼門の基礎石のところまで水が押し寄せる大洪水となりました。

このように、球磨川流域は度重なる水害に見舞われてきましたが、そのたびに復旧・復興を遂げてきました。

人吉市九日町(昭和 40 年７月)　出典：九州地方整備局 八代河川国道事務所

この度の令和２年７月豪雨では、短時間の急激な豪雨により、球磨川本流や支流の各所において堤防決壊、越水、排水路、用水等の内水氾濫等による大規模な浸水被害が市内の広範囲で発生し、護岸の崩落、橋りょう流失、道路の損壊、鉄道の損壊など多岐に渡り甚大な被害となりました。

■令和２年７月豪雨の被害状況

発生年月日・原因	被害状況			
令和２年７月３日～７月４日 梅雨前線・豪雨 再考推移 6.9～7.6ｍ	死者	21 人	福祉施設	319,613 千円
	負傷	17 人	衛生施設等	5,241,987 千円
	全壊	902 戸	商工被害	27,904,790 千円
	半壊	1,452 戸	農作物等被害	125,824 千円
	一部損壊	308 戸	農業施設	3,000 千円
	非住宅被害	1,946 棟	農地等被害	9,200,000 千円
			林業関係被害	704,132 千円
			公共土木施設	11,702,066 千円
			都市施設等	656,262 千円
			公立文教施設等	747,880 千円

出典：令和６年度人吉市地域防災計画書・水防計画書

３）自然の恵み・歴史とともに育んできたなりわい

（１）人吉温泉

人吉温泉の歴史は古く、開湯時期は不明ながら、1492(明応元)年に相良家 12 代当主為続（ためつぐ）が湯治をしたという記録が残っています。

現在も温泉町には湯の神神社や湯の元観音があり、その歴史を感じさせます。

人吉温泉は 1910(明治 43)年に翠嵐楼が温泉掘削に成功したのが始まりで、鹿児島線（現肥薩線）の全線開通や球磨川くだりの開始とタイアップして林温泉の名は広く知られ、大正期にかけて全盛期を迎えました。

人吉市の中心部では、1929(昭和 4)年の中央温泉を皮切りに、1940(昭和 15)年までに 21 カ所が開削され、その後泉源は 31 カ所になり、林温泉を含めて人吉温泉と称するようになりました。

人吉温泉の泉質は弱アルカリ炭酸泉等で、しっとりとした優しい肌触りが特徴であり「美人の湯」と称されています。球磨川沿いを中心に旅館や公衆浴場が点在し、泉源の数は 50 を超えます。

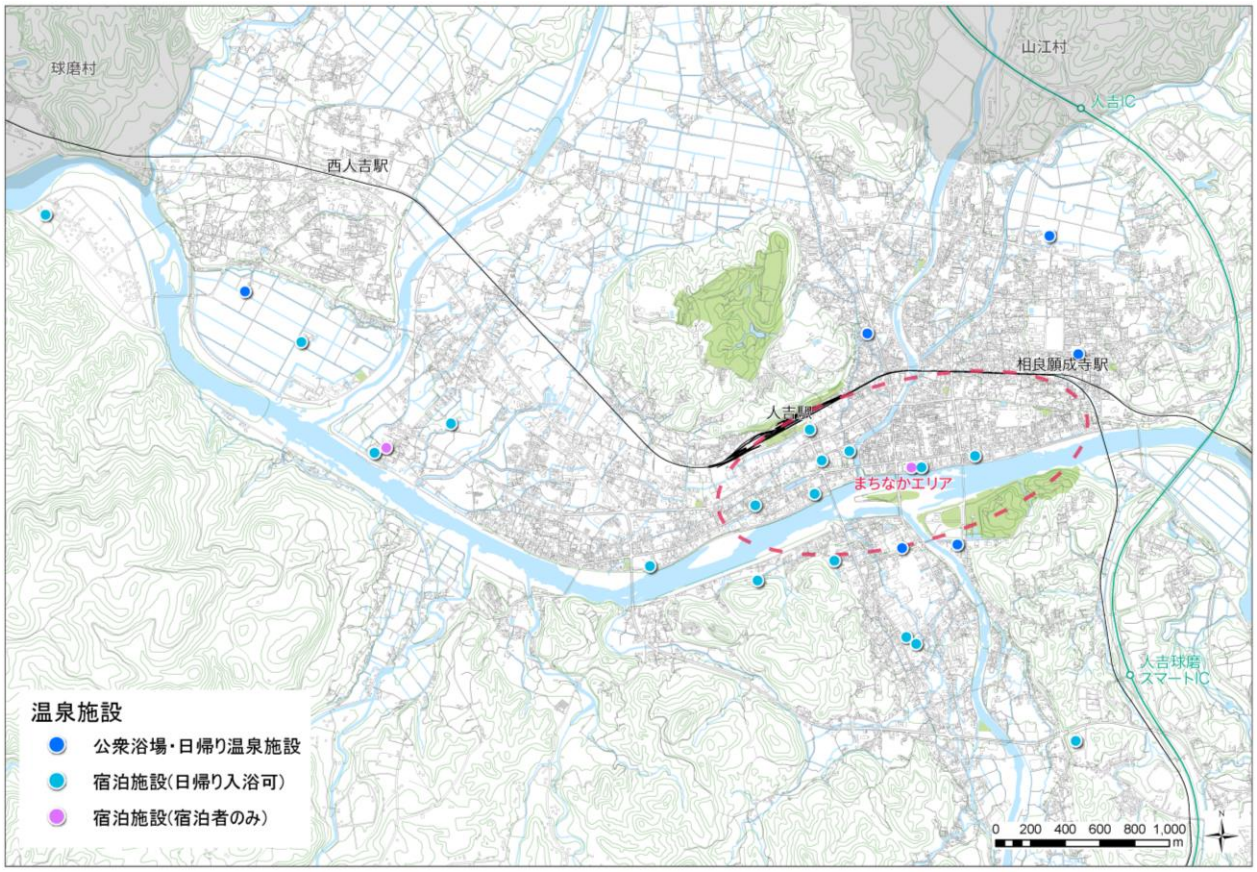
現在、市内の温泉施設は 27 軒で、公衆浴場の他、多くの旅館・ホテルでも立ち寄り湯を楽しむことができます。

■市内の温泉施設

施設タイプ		施設数
宿泊施設	宿泊のみ	2
	日帰り入浴可	16
公衆浴場・日帰り温泉施設		9※
合計		27

※休業中１軒を含む

■温泉施設の分布



（２）球磨焼酎

球磨焼酎は、盆地特有の寒暖の差が激しい気候と風土が育む豊かな大地により作られた良質な米と清らかな水を用いて、丹精に造られた蒸留酒です。

およそ 500 年前から人吉球磨地域の産業として発展してきました。

熊本県内の北側は日本酒圏、南側が球磨焼酎圏と知られていますが、これは南部が約 700 年間相良氏に支配されたことで、熊本藩とは文化的にも独立していたことが影響しています。

室町時代に、相良氏が東南アジアや対立と活発な交易を行う中で蒸留技術が伝わり、さらに、文禄・慶長の役で大陸から新しい蒸留技術が伝わったことで、現在に伝わる球磨焼酎の製法がほぼ完成したとされています。

江戸時代には人吉球磨地域で盛んに製造されるようになりましたが、当時は、貴重な米を原料とする米焼酎は上流階級の武士に飲まれ、庶民は大麦や雑穀を原料とする自家製焼酎を飲んでいました。

1995(平成７)年には、国税庁によって「球磨焼酎」が定義され※、「地域的表示の産地指定」を受けると一気にブランド化し、球磨地方以外にも多くの愛飲者を獲得しました。

※定義：米のみを原料として人吉・球磨の地下水で仕込んだもろみを人吉・球磨で蒸留し、瓶詰した焼酎

球磨焼酎の蔵元は、江戸期の 1657 年に酒造株制度が開始され、醸造販売が認められた蔵元は 20 軒でした。

明治期（1871 年）には酒造株制度が廃止され、届け出れば誰でも酒造可能となったことで、約 60 軒が群立しました。

大正期（1923 年）には 53 軒で製造され、現在は個性ある 27 の蔵元（人吉市内 8 蔵元）が酒造りを続けています。

各蔵元は複数の個性ある銘柄を持ち、その数は 200 種以上に上ります。

こうした多彩な焼酎を活かし、2020(令和 2)年 3 月には、球磨焼酎を通じ、焼酎蔵とその周辺地域の観光振興及び経済的発展に寄与することを目指し、蔵元、卸売店、宿泊施設、交通事業者などで構成する「球磨焼酎蔵ツーリズム協議会」が発足しました。

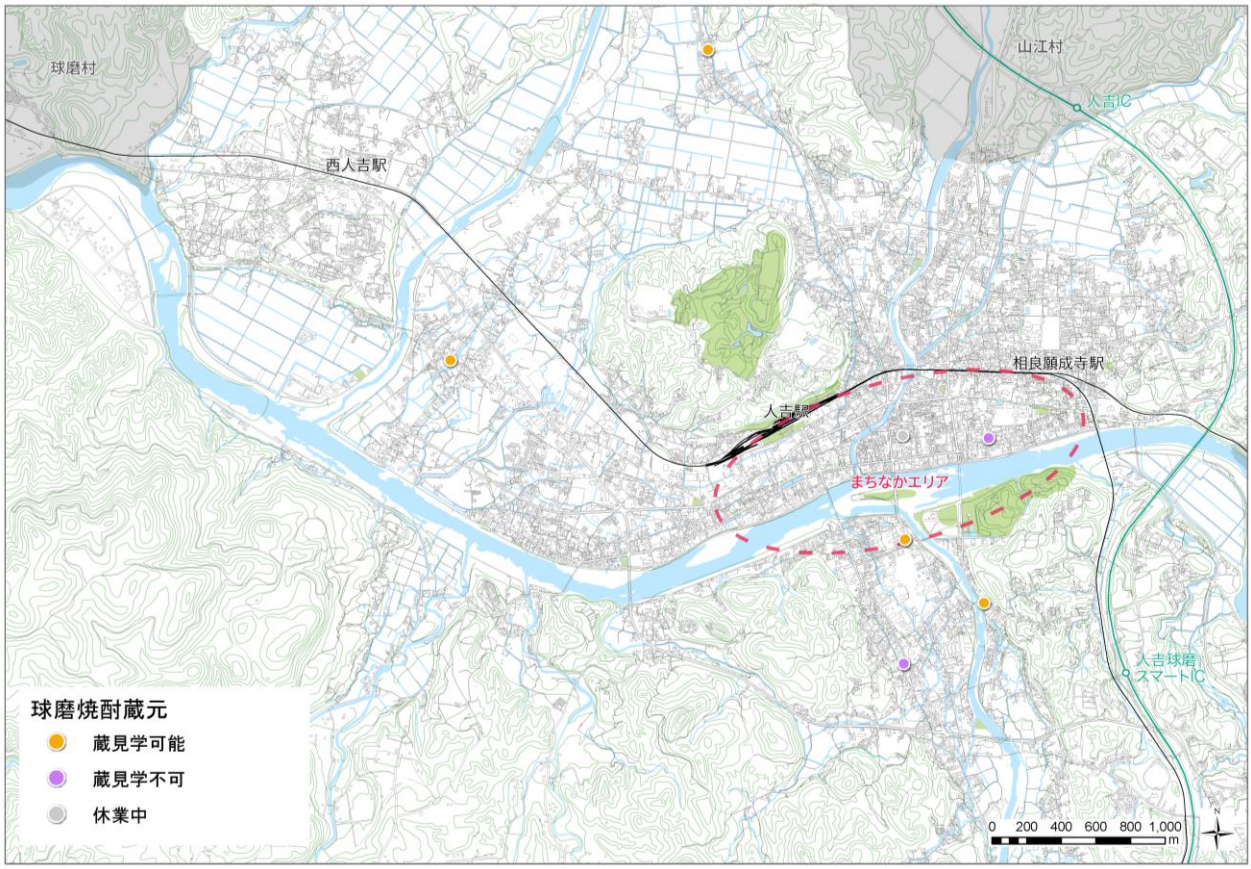
■蔵元の所在地と銘柄数

所在地	製造工場数	銘柄数
人吉市	9	104
多良木町	6	93
あさぎり町	5	91
錦町	2	17
水上村	2	41
湯前町	2	49
球磨村	1	2

資料：人吉市統計年鑑（球磨焼酎酒造組合）

図出典：球磨焼酎酒造組合ホームページ
（https://kumashochu.or.jp/wp/）

■蔵元の分布


球磨村
山江村
人吉IC
西人吉駅
相良願成寺駅
人吉駅
まちなかエリア
人吉球磨
スマートIC
球磨焼酎蔵元
蔵見学可能
蔵見学不可
休業中
0 200 400 600 800 1,000
m
N

（３）球磨川くだり

球磨川の舟運は、江戸時代（1664(寛文４)年）に舟路が開削されて以来、参勤交代にも利用されるなど、人吉・球磨地域の交通と物流に欠かせないものでした。

舟運は 1908(明治 41)年に肥薩線（八代－人吉間）が開通されるまで盛んに行われ、鉄道の登場により衰退していきましたが、その後「球磨川くだり」として生まれ変わりました。

球磨川くだりは、1910(明治 43)年に翠嵐楼の創業者が川舟を活用した観光遊覧船を事業化したのがはじまりとされています。

以降、旅館が宿泊客の希望に応じて貸し切り舟を運航していましたが、1927(昭和２)年、観光への関心の高まりを受けて、球磨川くだりの定期船の運航が開始されました。

1932(昭和７)年には与謝野鉄幹・晶子夫妻も人吉に訪れ、球磨川くだりを楽しんだとされています。

その後、戦時中の中断や水難事故による事業内容の見直しなどを経て、1963(昭和 38)年に人吉観光株式会社（現・球磨川くだり株式会社）を設立し、現在まで川下りの文化が受け継がれています。

令和２年７月豪雨災害では発船場や船舶、運搬・送迎用車両等に壊滅的な被害を受けましたが、2021(令和３)年７月には観光拠点施設「HASSENBA」として再生しました。

現在は、短縮区間による運航再開などを経て、HASSENBA（人吉発船場）～温泉町着船場の 4.5km を下っていく「清流コース」、人吉城跡の石垣を間近で眺め、風情ある遊覧体験のできる「梅花の渡し」を運航しています。

球磨川くだり（清流コース）

球磨川くだり（梅花の渡し）

図出典：球磨川くだりホームページ（https://www.kumagawa.co.jp/）

４）教育プログラム

①一井正典「青雲の志」育成事業

本市では、明治・大正・昭和の三天皇の侍医を務めた人吉市の偉人である一井正典の足跡を辿る中で、一井氏と同じように志を高く持ち、グローバルな人材を育成することを目的に、2013(平成 25)年から高校生を米国に派遣する「青雲の志」育成事業を行っています。（コロナ禍以降一時中断）

②ひとよしくま熱中小学校

2021(令和３)年､「もういちど７歳の目で世界を…」をテーマに全国で活躍する一流の起業家・経営者・大学教授らが先生となって授業を展開する”学びたい大人の社会塾”､「ひとよしくま熱中小学校」が誕生しました。（運営：一般社団法人ドットリバー）

高校生から 80 歳代までこれまで 170 名以上の生徒が入学し、現在第８期の始業（2025 年４月開校）を予定しています。

③県立高校の地域連携

人吉・球磨地域には、４つの高等学校が立地し、各校とも特色ある学科を設けています。そのうち、人吉高校及び球磨工業高校の２校が人吉市内に位置しています。

球磨工業高校では、人吉・球磨地域内の社殿の新築（伝統建築専攻科）や、球磨川くだりの川舟で使用する舟くぎの製作（機械科)、2022(令和４)年５月に開庁した新市庁舎で使用する木製ベンチと案内板のピクトグラムの製作（建築科）など、地域と連携した実績的な学習活動が行われています。

人吉高校では、令和４年度から文部科学省より「新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム)」の研究指定を受け、令和２年７月豪雨災害からの創造的復興を担う人材の育成を目指し、地域課題の解決に向けた探求活動等において、オンラインによる都市部の大学や研究機関、企業等との連携に向けた新たな教育資源の確保に関する研究や、ＶＲやＡＩ等の先端的な技術を有効活用する教育方法の開発等に取り組まれています。

また、人吉高校及び球磨工業高校のカヌー部は、球磨川を使ってトレーニングをし、熊本県代表として全国大会でも入賞しています。

5）コンパクトで多様な顔を持つまちなか

本市は、人吉球磨地域の主要施設が集積する、暮らしと観光の拠点的都市であり、2024(令和６)年には東洋経済新報社の「住みよさランキング 2024」で総合１位を獲得しました。

「住みよさランキング」は、安心度、利便度、快適度、富裕度の４つの観点から 20 項目のデータを使って算出されるもので、人口規模に対して飲食店が多く、人吉温泉や球磨川下りができる自然豊かな観光資源を有することが特徴として挙げられています。

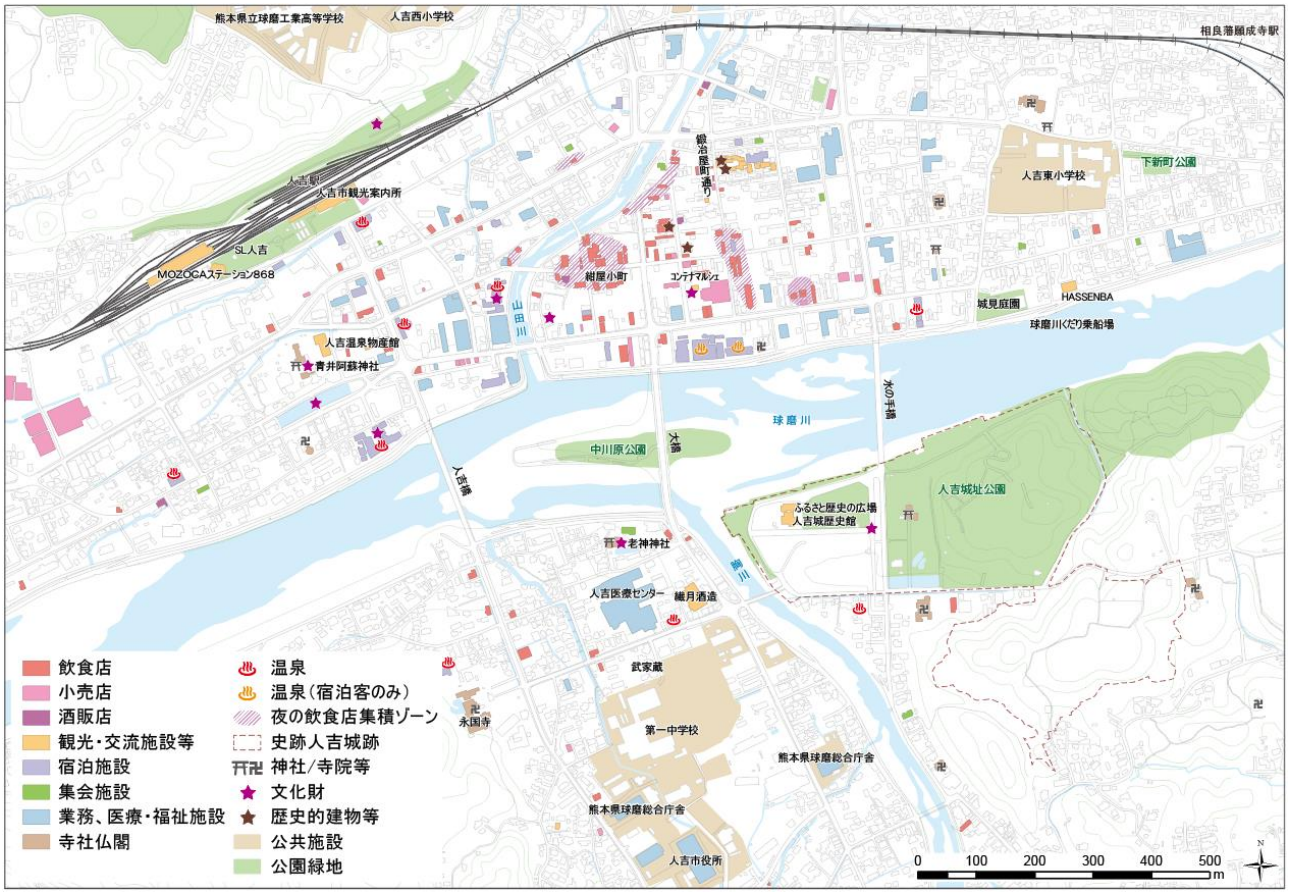
特に、まちなかエリアは人吉駅の概ね１km 圏に旅館・ホテル、繁華街、温泉施設等が集積し、エリア内～周辺部に史跡や文化財等の歴史資源が点在しています。

市民生活面でも、スーパーや飲食店などの商業施設、銀行・郵便局などの業務施設、病院・福祉施設などの都市機能が立地し、一定の暮らしやすい環境を形成しています。

また、昔ながらの町割り（短冊状の敷地）が残っているため、歩行者が比較的安心して歩ける交通ネットワークが形成されており、徒歩や自転車でも回遊しやすい観光地を形成しています。

さらに、街並みの中に公衆浴場や石蔵、味噌・醤油蔵、焼酎蔵等の歴史的建物が今も残っています。

■まちなかエリアの資源分布



２　人吉市を取り巻く環境

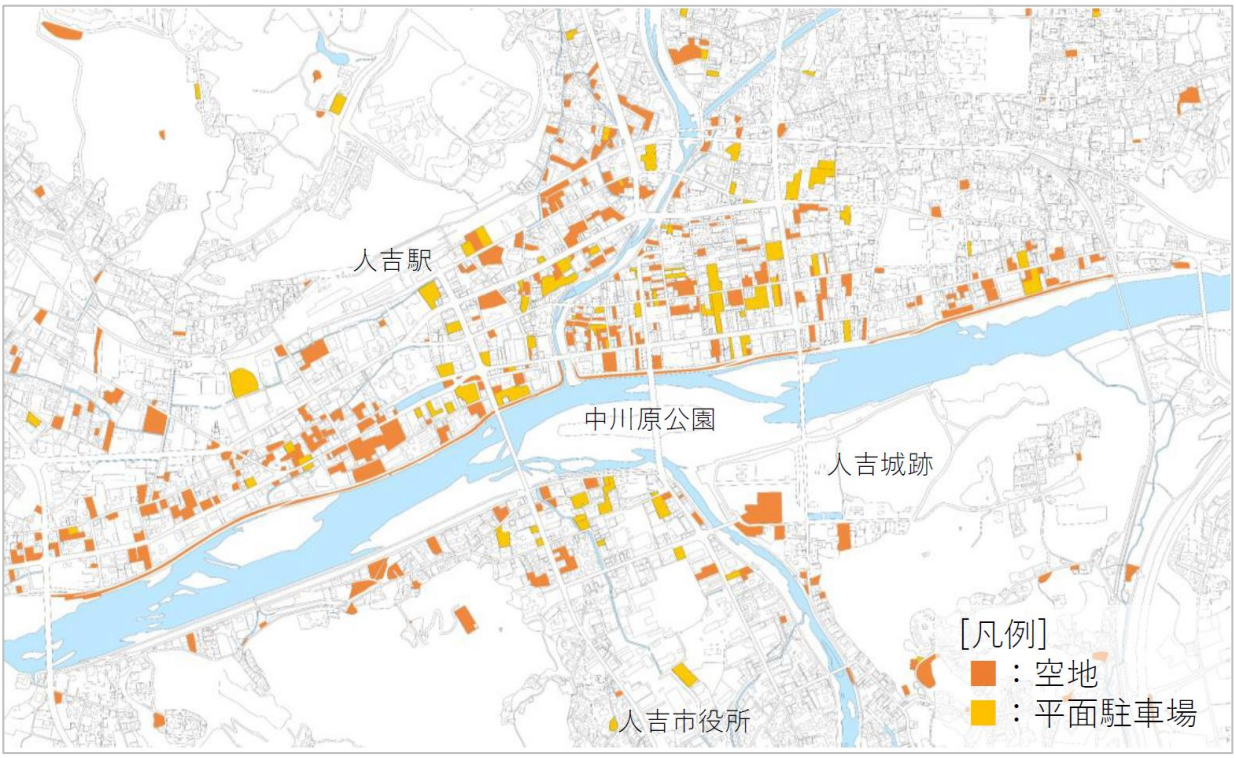
１）郊外の利便性とまちなかの衰退

まちなかエリアでは、災害後の建物解体により空き地が増加し、暫定利用の駐車場等を含めた低未利用地が広く分布するなど、空洞化が進行しています。

一方、周辺地域では災害以前から国道などの幹線道路沿線に大規模小売店舗等が立地し、生活利便性が高まっています。

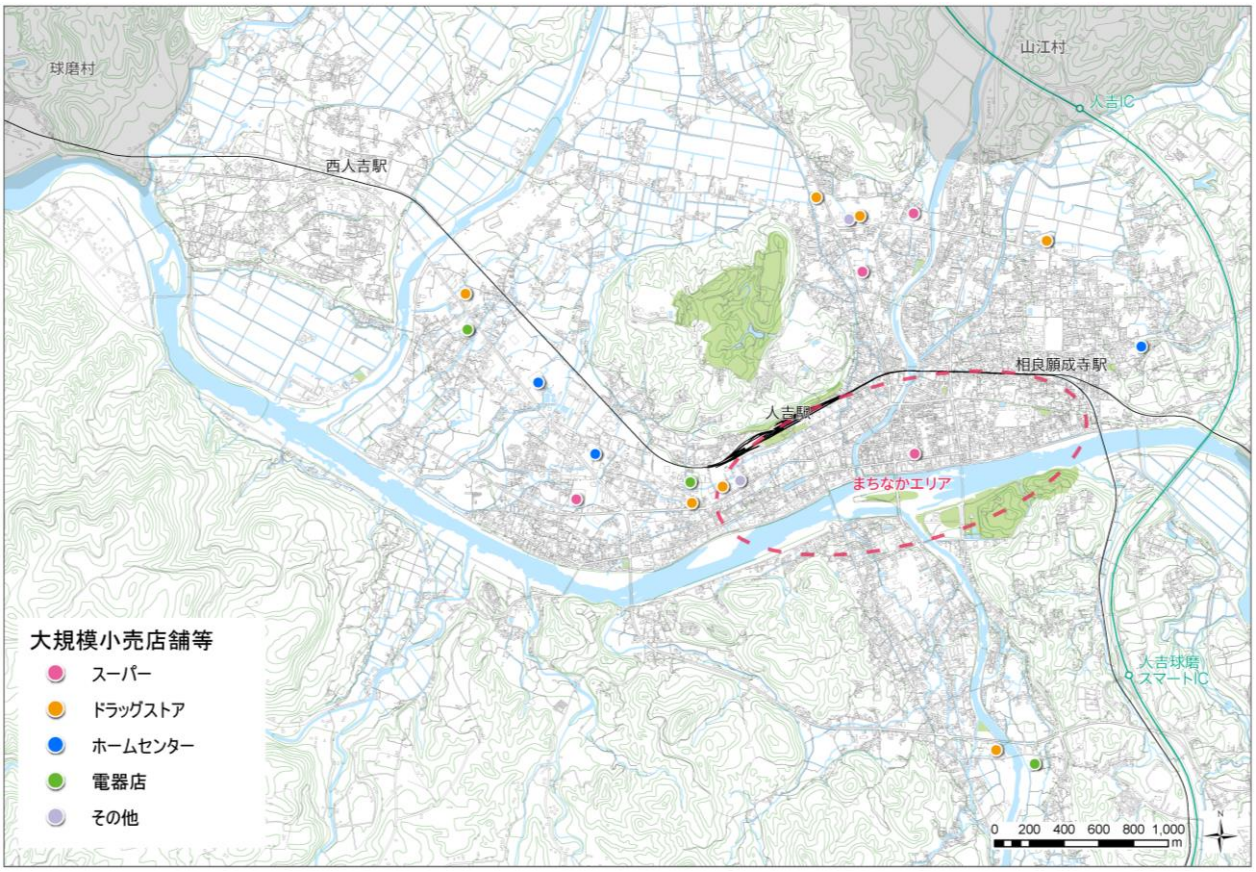
従来からの課題であったものの、被災による鉄道運休が相まってまちなかへアクセス可能な公共交通が少なく、自家用車での移動割合が高くなっています。

■まちなかエリアの低未利用地（空き地、駐車場）の分布（令和５年度時点）



資料：人吉市まちなかグランドデザイン推進アクションプラン

■大型小売店舗等の分布



資料：熊本県　大規模小売店舗立地法届出状況（令和 6 年 12 月末現在）

■人吉市へのアクセス手段

博多ﾊﾞｽﾀｰﾐﾅﾙ～人吉 IC
【約２時間 20 分】

熊本桜町ﾊﾞｽﾀｰﾐﾅﾙ～人吉産交
【約１時間 50 分】

鹿児島空港～人吉 IC
【約１時間】

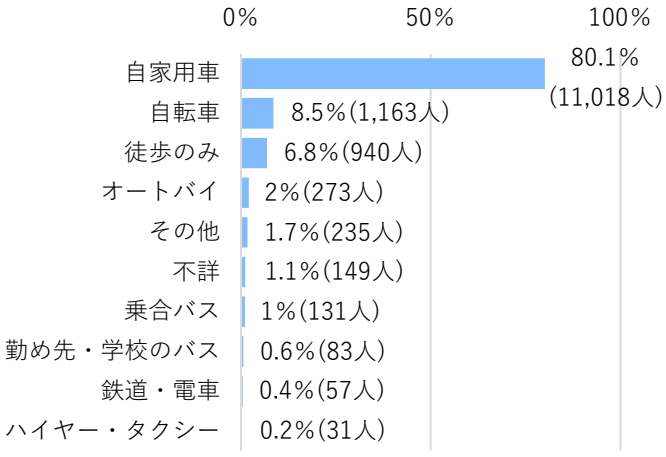
宮崎駅～人吉産交
【約１時間 40 分】

※鉄道での都市間移動は運休中
ＪＲ肥薩線：八代～吉松間
くま川鉄道：人吉温泉～肥後西村
（代替バス運行中）

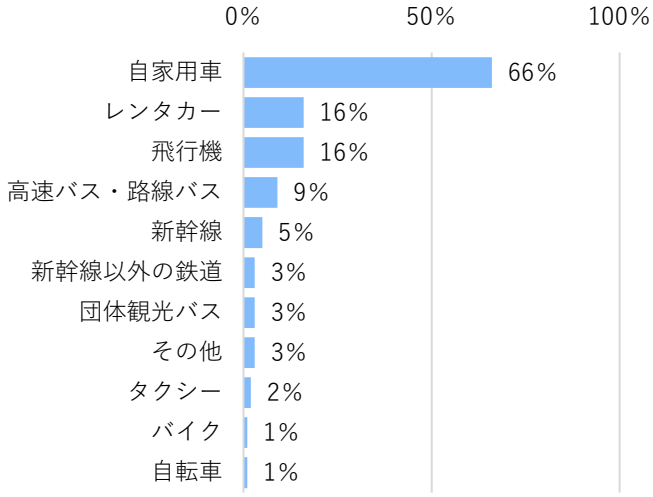
背景図：「国土数値情報(行政区域、鉄道、高速道路時系列データ)」（国土交通省）
(https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/index.html)を加工して作成

■交通の分担率

【通勤・通学の交通手段】※1



【観光の交通手段】※2



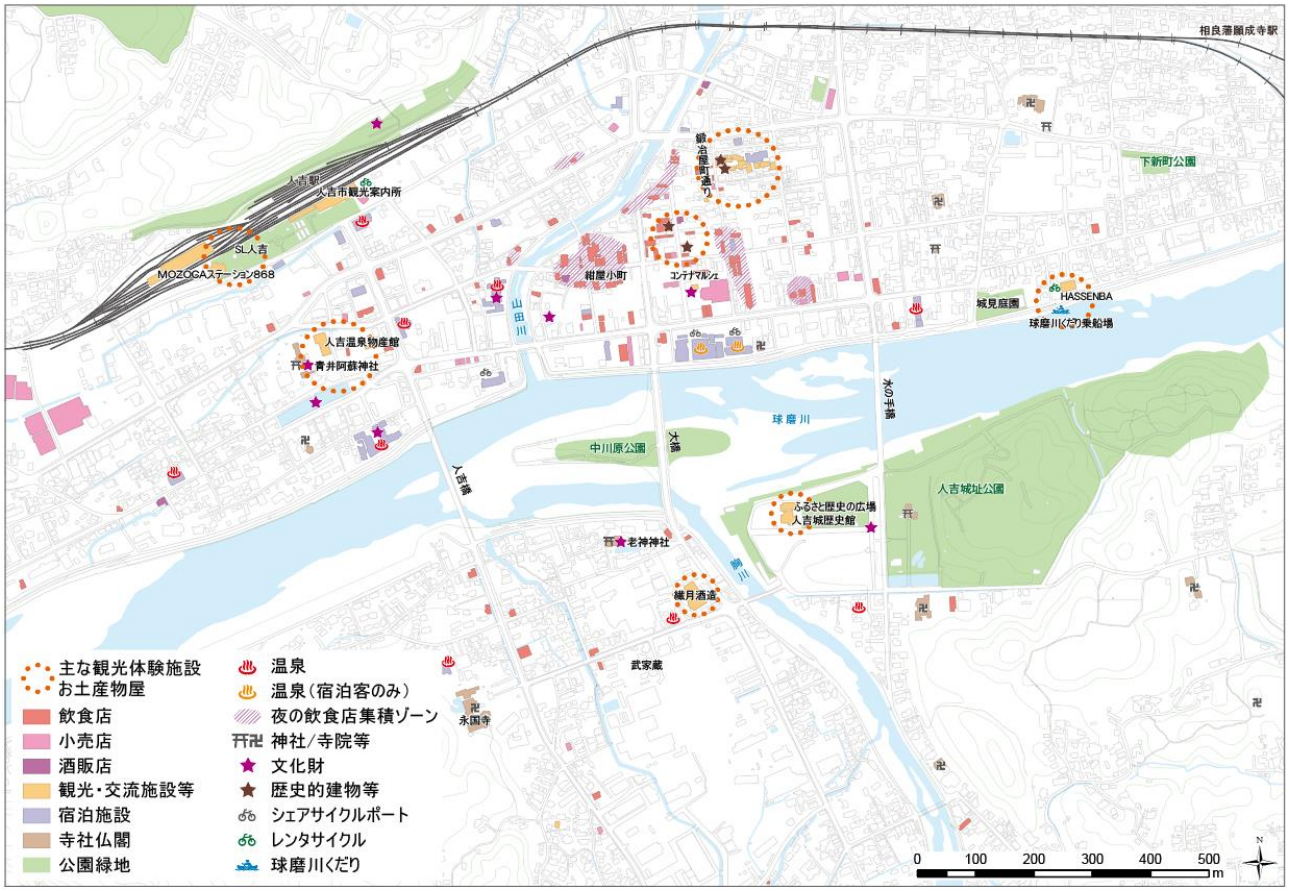
資料：※１　従業地・通学地(人吉市)による、利用交通手段別通勤者・通学者数(15 歳以上) [複数回答可]/令和２年国勢調査
※２　出発地から人吉球磨地域に来るまでに利用した交通手段[複数回答可]/令和５年度人吉球磨観光実態調査(一般社団法人　人吉球磨観光地域づくり協議会)

2）観光地としての「わかりやすさ＝ホスピタリティ」の不足

独自の歴史や文化に培われた豊富な観光資源を持ちながら、市内では、温泉地ならではの日帰り入浴や湯めぐり、まちの文化体験、特産品を味わえる場所や土産物を購入できる場など、観光地としての分かりやすい情報発信や文化体験できる機能や環境が十分でない面があります。

宿泊施設・飲食店等が集積するまちなかでは、地元の食や温泉などを楽しみながらそぞろ歩きできる環境が十分に整っておらず、スナック街などナイトエンターテインメントを体験できる機能は存在するものの、昼間にまちの文化体験をエンターテインメント的な要素を持って体験できる機能が不足していることなどが挙げられます。

■まちなかエリアの観光体験施設、お土産物屋などの分布



3）宿泊施設の偏り

市内の主な宿泊施設は旅館とビジネスホテルが中心で、やや富裕層向けの観光客とビジネス利用者をターゲットとした施設がほとんどです。

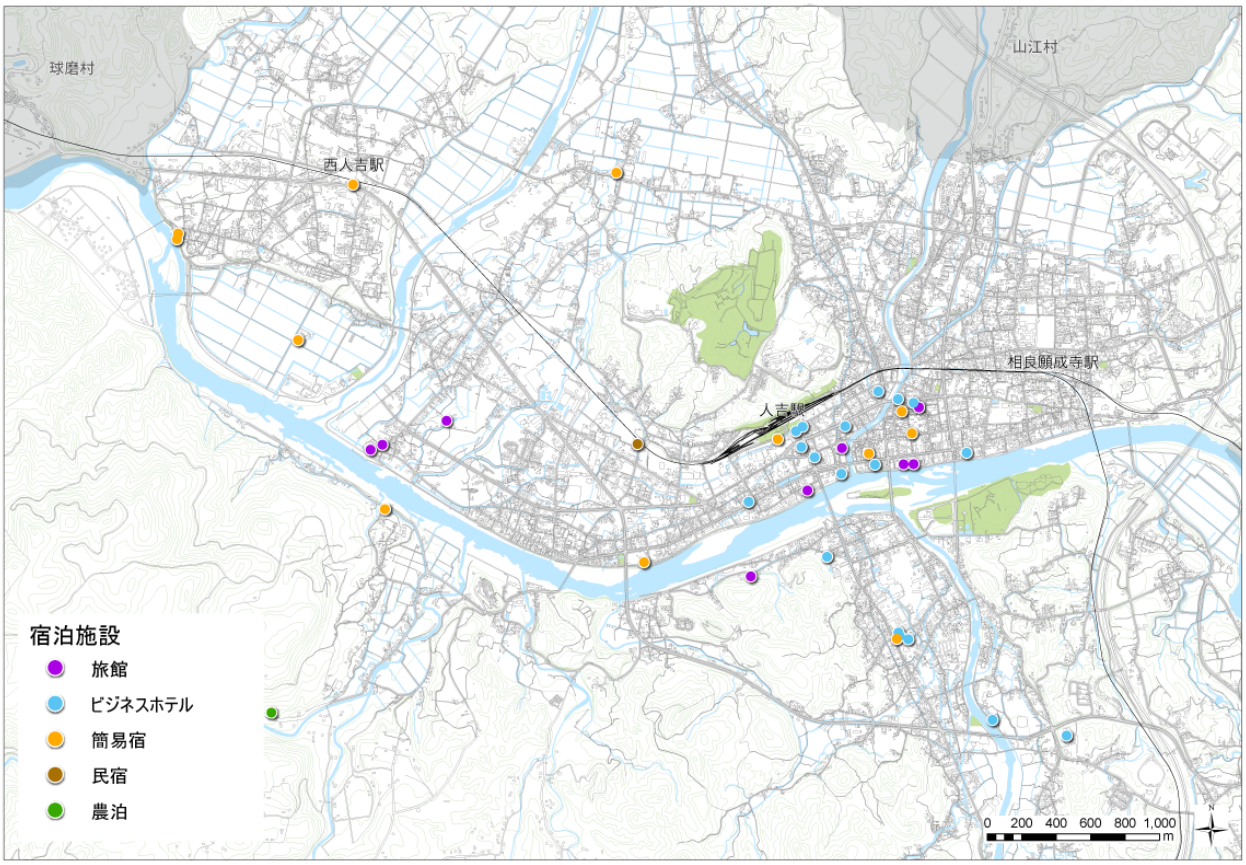
近年では新たなゲストハウス等の立地がみられますが、若年層向けの旅を楽しむための宿泊施設や、近年のホテルトレンドである、まちの文化を楽しむライフスタイルホテルが少ない状況にあります。

■市内の宿泊施設

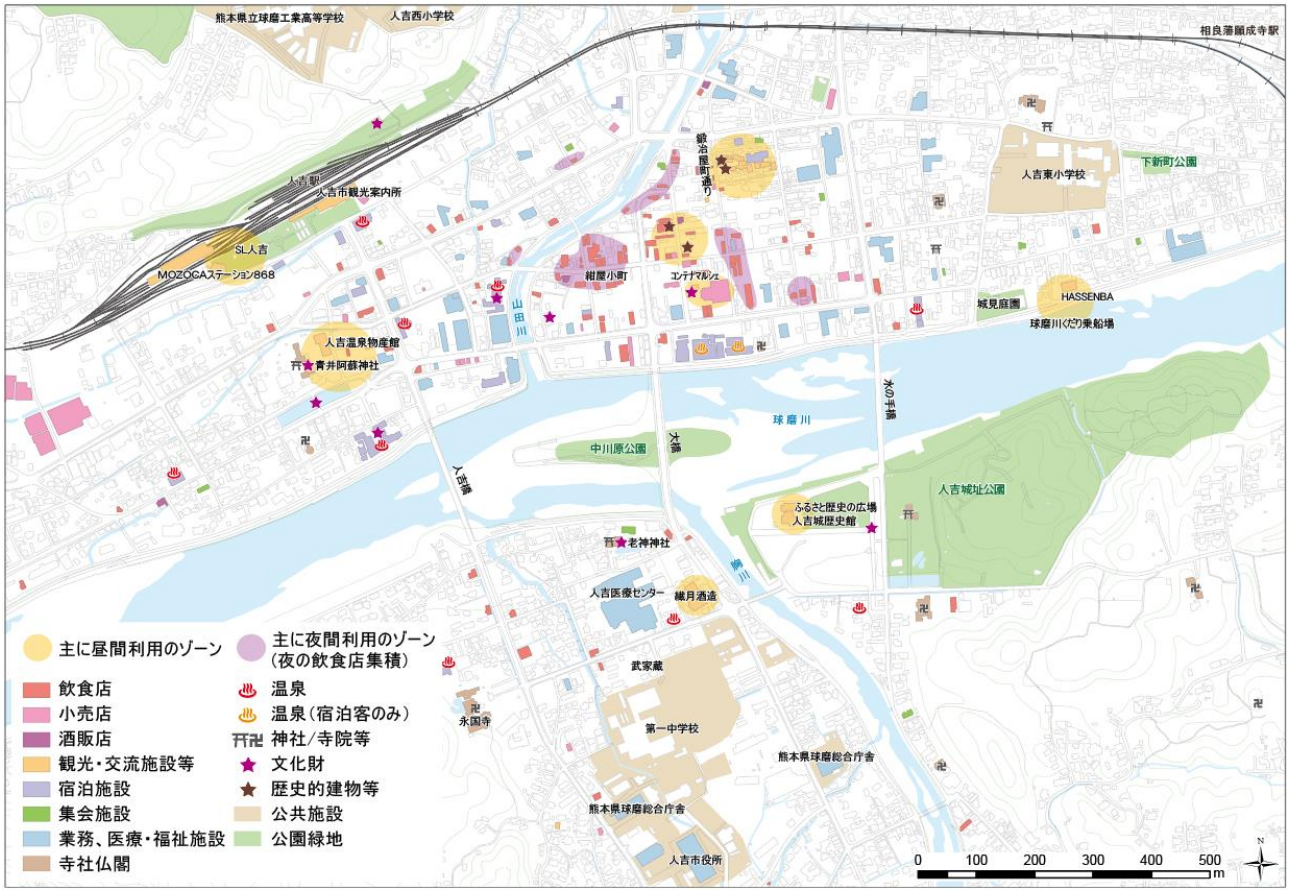
種類	施設数	定員
旅館	10	708
ビジネスホテル	18	776
簡易宿	12	154
民宿	1	12
農泊	2※	7※
合計	43	1,657

※休業中１軒を含む

■宿泊施設の分布



４）まちなかの市民の暮らしや交流を支える機能の不足

まちなかエリアは、九州の奥座敷として、夜間の性格が強い繁華街として発展しており、災害後から現在までにコンテナマルシェの設置やスーパーの再建、人吉紺屋小町の開業などによりまちの再生の兆しがあるものの、子育て世帯やファミリー層、中高生をターゲットとした教育や文化、交流施設は少なく、旅館業や病院等の従業員向けの昼間の飲食を提供するサービス等も少ない状況です。

■まちなかエリアの昼間/夜間の土地建物利用分布